

令和 5 年 10 月 25 日現在

機関番号：34410

研究種目：基盤研究(C)（一般）

研究期間：2017～2022

課題番号：17K01706

研究課題名（和文）勝利達成にむけた精神的側面の検討 全日本柔道強化選手40年間の心理データから

研究課題名（英文）Considerations for Mental Aspects Required to Achieve Victory - 40 Years of Psychological Data from All Japan Judo National Team Members

研究代表者

東山 明子 (Higashiyama, Akiko)

大阪商業大学・公共学部・教授

研究者番号：20228711

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 3,500,000円

研究成果の概要（和文）：スポーツでの勝利条件の一つである心理的条件をパーソナリティから解明することにより、勝利達成のための指導体系を構築することを研究の目的とした。研究対象は、ミュンヘンオリンピックからロンドンオリンピックまでの全日本柔道連盟強化選手2003名であり、心理的アセスメントデータとして内田クレペリン検査データのべ5132枚について、精神的側面特徴（人柄特徴、精神的健康水準、心的エネルギー水準、曲線傾向、その他の特徴の有無等）について分析し、競技関連情報である性別、年代、検査時期、メダル区分等の特徴や傾向について検討した。その結果、特定人柄の優位性や精神健康度の高いこと等が勝利達成条件として示唆された。

研究成果の学術的意義や社会的意義

日本の柔道は世界でもトップ水準にあり、トップ水準のスポーツ種目を対象に40年にわたる膨大な心理データを基に分析した研究はこれまで見られなかったうえに、今後も40年分ものデータを蓄積することは難しいと思われる。本研究のデータはそれだけでも十分に学術的に非常に貴重なものである。さらに、オリンピック出場およびメダル獲得、世界選手権出場およびメダル獲得等のトップ水準の中でもさらに高い選手のデータを分析しており、世界の最高峰に至るための心理的条件が把握されたことは、今後の柔道界の選手育成のみならず広くスポーツ全般の選手を育てるうえでの知見が得られ、社会的にも学術的にも大きな意義があると思われる。

研究成果の概要（英文）：The purpose of this research is to understand how to create a coaching system based on the analyzing the psychological aspects of the athlete from personality tests. Subjects of the research are the 2003 national team athletes selected by the All Japan Judo Federation in consideration for the Olympic Games between 1972 (Munich) and 2016 (London). From these athletes, 5133 sets of psychological test results from the Uchida-Kraepelin assessment were analyzed based on mental characteristics (personality traits, mental health level, emotional energy level, etc), and we cross examined those data against competition data such as age, gender, test period, medal achieved, etc, to see if we could identify any trends or correlation. The result suggested that superior personality traits and high levels of mental health could be the required mental conditions to achieve competitive victory in sports.

研究分野：スポーツ心理学

キーワード：内田クレペリン検査法 柔道 全日本柔道連盟強化選手

1. 研究開始当初の背景

(1) 日本の柔道界で、2012年までの約40年間の間に集積した膨大な内田クレペリン検査データ(UK法)を元に、船越正康により、各選手の個性特徴や精神的健康水準を把握し、コーチングやコンディショニングに役立ててきた。UK法は、パーソナリティ類型だけではなく心的エネルギー水準や精神健康度や行動の仕方の特徴など、多くの情報を含有する心理検査である。これらの研究は随時個々の選手たちへのメンタルサポートに生かされ、アスリートのメンタルサポートのあり方に多くの示唆を与えてきた。しかし、競技成績と心理的条件の関係の法則性を見出すまでに至ったとはいえなかった。

(2) 心理アセスメントは、各選手がそれぞれの有する長所や強みを遺憾なく発揮するために、選手自身が自己の心理的特性を把握すると同時に指導者も選手の長所を伸ばす指導のために選手理解に役立てるものである。けっして選手選抜に使用されてはならないものであるが、トップアスリートの心理アセスメントデータが集積されると、その心理アセスメントを通じた勝利達成条件が浮かび上がってくる。全日本柔道連盟が、40年間にわたって活用してきた日本の柔道トップ選手らの長期間にわたる膨大なデータの蓄積がなされており、そのデータを戦績から分析すると、日本柔道の勝利達成条件が把握できることから、柔道種目だけでなく、競技種目の枠を超えて勝利達成のための指導や支援のあり方を構築することが可能であると考えた。

2. 研究の目的

(1) スポーツの場において勝つための条件の一つである心理的条件に焦点を絞り、その中でも特にパーソナリティ条件を解明するために、これらのデータを分析することとなった。数ある心理アセスメントの中でも特にそれらのデータを分析し、高い競技力を有する選手の心理的特徴を見出すことは、柔道競技だけでなくスポーツ界全体にとっても選手サポートにも有用であると思われる。スポーツ場面で高いパフォーマンスを発揮し、好成績を残すための精神的側面の特徴の法則性を見出すことを目的として本研究を行った。

(2) 分析対象は世界的に高レベルにある日本柔道で40年にわたる全日本柔道連盟強化選手2,003名、(男子1,256人、女子747人)のべ5,132枚のデータである。高レベルのデータがこれほど多く保存集積されている競技は他にはない。最高レベルの競技者らのUK法のデータを分析することによって、信頼性の高い客観的な競技行動予測や指導指針等を明らかにすることができ、競技力向上や目標達成の確率を高めることができる。

3. 研究の方法

(1) 集積されたUK法のデータから、人柄特徴としての性格特性、精神的健康状態の程度、心的エネルギー水準、曲線傾向等を精神的側面の特徴として整理し、競技成績との関係を明らかにし、成績優秀選手の特徴、年齢段階別の選手の特徴、男子選手と女子選手の特徴の違い、勝利選手とそれ以外の選手の特徴の違いを検討し、経年度にわたる複数のデータのある選手らについては、その変化の様相と競技成績との関係を検討する。

(2) 男女別・年齢区分別初回検査時データの分析では、初回検査時データに限定し、類似人柄4群の出現率と5精神健康度水準のクロス分析を行った。最高精神健康度及び最高作業量段階の分析では、人柄12類型と類似人柄4群の出現率と3精神健康度水準、4作業量段階のクロス分析を行った。曲線傾向分析では、3曲線傾向の出現率を2×4または2×2の二乗検定と臨界値CRにより分析した。いずれも有意水準は5%未満とした。

4. 研究成果

(1) 全柔道強化選手データの分析

人柄類型

表1に全選手の曲線傾向別・人柄類型別・精神健康度別データの分布を示した。図1に年齢区分別・男女平均曲線を示した。全柔道強化選手データ分析研究の概要としてデータ全体からは、人柄類型8型が全体の約4割を占めており他の類型に比べて圧倒的多数であることが分かった。類似人柄群分析では、群堅実派が群個性派に次ぐ多さであることが分かる。また、群活動派(3-1型、4型、6型)は極めて少数であり、柔道競技が元気さや勢いだけでは対応できないスポーツであることを示している。4年齢区分別分布では8自己内閉型37.9%が1位を占め、3-1dじっくり型19.3%が続く。単一類型ではこの2つの類型が柔道適性を代表する。

精神健康度

表2に男女別3精神健康度別出現比を示した。精神健康度水準では、精神健康度高度群が1,163人(58.1%)、中度群449人(22.4%)、低度群391人(19.5%)であり、高度と低度、中度と低度に差が認められた。各選手の複数枚あるデータの中の最も精神健康度が高いものを抽出すると、

それでも中下度や程度の低い精神健康度を示す選手もいるが、群協調派には低度は見られない。高度群が過半数を占めることから、柔道強化選手は高精神状態の集団であることが伺える。高健康集団であることが、日本が常に世界でも強豪国として第一線で戦うことができる要因と考えられ、今後もこの水準を保ち続けることが、世界のトップで活躍するために必要不可欠となる。柔道の強化選手とは、各世代での全国大会の上位に勝ち上がり選抜された柔道のエリート集団であり、高精神健康度であることが好成績につながるというこれまでの先行研究と同様に、柔道競技においても、同様の結果を得ることができたと考える。なお、高+中上度の男女別出現率はどの傾向においても女子が高く、上昇；57.6：52.5%、平坦；56.2：43.3%、下降；55.4：42.3%であった。

心的エネルギー（作業量段階）

心的エネルギーを表す作業量段階からは、男女ともどの年齢区分でも健常者常態平均曲線の経過に近似しており適応の速さを象徴する1行目の突出、柔軟性を示す前期の湾曲、健康度判定における第一指標である後期増減率の高さ、精神疲労を表す後期の下降傾向の少なさ、健康な興奮現象を示す前後期後半の上昇傾向が確認された。男女ともに中学生時点で一般成人が持つ心的エネルギー（作業量）水準に達しており、年齢区分毎に漸増して大学生男子は女子を上回る。しかし社会人では女子の作業量が急増して高能率水準を示した。一方、作業量段階が低くなるにつれて精神健康度が低くなる傾向がみられ、作業量段階が低いC段階では、精神健康度高度や中上度が皆無となる。

曲線傾向

曲線傾向の出現数/率は、上昇 879 人/43.9%、平坦 635 人/31.7%、下降 489 人/24.4%であった。精神健康度の高+中上度：中度：中下+低度の3分比では、上昇 478/879 人 54.4%、平坦 307/635 人 48.3%、下降 230/489 人 47.0%であり、上昇傾向の高健康比率が高かったことから上昇傾向が柔道適応に優位に働くことを表している。

(2) オリンピック代表選手と世界選手権代表選手の比較分析

代表選手の抽出とデータの選別

オリンピック代表選手と世界選手権代表選手の抽出として、オリンピック出場かつ世界選手権出場の選手は「オリンピック代表選手」、オリンピック不出場で世界選手権出場選手を「世界選手権代表選手」と分類した。「オリンピック代表選手」は、男子 52 人、女子 34 人、合計 86 人、「世界選手権代表選手」は、男子 43 人、女子 36 人、合計 79 人であった。UK 曲線は検査実施時の精神健康度によって曲線経過が変わる。選手本来の姿は精神健康度が高いときに現れる。メンタルサポートは高健康に向けて行われるため、複数回の検査結果の中から最高健康時のデータを抽出して分析対象とした。対象者の UK 検査用紙が複数枚ある場合には人柄類型、最高健康度、最高作業量段階、上昇曲線の順に高いものをデータとして採用した。オリンピック代表選手と世界選手権代表選手の人柄類型別分布を表 3 に、作業量段階別分布を表 4 に示した。

人柄類型

人柄類型の出現率では、最も多い群（8型）に注目すると、オリンピック代表選手の類似人柄群では個性派群が多数を占め、それ以外の出現率との差が認められた。世界選手権代表選手の群とその他の群の出現率に差は認められなかった。個性の強い群の出現率がオリンピック代表選手に多いことから、他人が模倣できない技で相手に勝利する選手が代表になっていることが推察される。

精神健康度

精神健康度では、オリンピック代表選手は、健康度高度 31 人（36.1%）、中上度 46 人（53.5%）、合計 77 人（89.6%）であった。世界選手権代表選手では、高度 23 人（29.1%）、中上度 42 人（53.2%）、合計 65 人（82.3%）であり、オリンピックと世界選手権どちらの代表群とも高健康度の集団であることが明らかになった。

心的エネルギー水準（作業量段階）

作業量段階では、オリンピック代表選手と世界選手権代表選手に差が認められ、オリンピック代表選手は世界選手権代表選手よりもA段階が多い。最高段階を示すA段階は高能率水準にあり、既成文化の再構築と創造に必要なエネルギーを持つ。次のA段階は一般成人水準を示し、既成文化の理解・吸収・伝達に必要な力である。作業量段階は心的エネルギーを表すことから、オリンピックや世界選手権に出場するためには心的エネルギー水準を上げる指導が必要であり、さらにオリンピックに出場するためにはA段階まで上げていく指導が望まれる。

(3) オリンピック代表選手と世界選手権代表選手の戦績別精神特徴

オリンピック代表選手、世界選手権代表選手それぞれについて、戦績を3分類（優勝、2+3位、5位以下）し比較検討したところ、特に曲線傾向に有意な差がみられた。表 5 にオリンピック代表選手の戦績別作業量段階・曲線傾向分布を示した。

オリンピック代表選手の曲線傾向では全体の 84 名中、上昇 56.0% > 平坦 32.1% > 下降 11.9% であった。特にメダリストと非メダリストにおいては3傾向間に差が認められた。メダリストは上昇 62.3% > 平坦 27.9% > 下降 9.8% であり、意欲・勢い・粘りに繋がる上昇曲線優位を認め、上昇曲線とメダル獲得に関係があることが示された。非メダリストでは上昇 39.1%：平坦 43.5%：下降 17.4% であり、各順位間差は認められなかった。

世界選手権代表選手の曲線傾向では戦績間差は認められなかったが、全体で見ると、上昇50.6% (40人) > 平坦29.1% (23人) 下降20.3% (16人) であり、上昇曲線が多かった。

(4) まとめ

以上の分析から次の5つの知見を得た。すなわち、人柄類型では特定個性として8型と3-1d型によって構成される集団である。高い精神健康度の集団である。心的エネルギー水準(作業量段階)は世界選手権代表選手よりもオリンピック代表選手に最高段階を示す㊤段階が多い。戦績別における類似人柄群の出現率はオリンピック代表では個性派群のメダル獲得率が高かったが、世界選手権代表選手には認められなかった。戦績別における曲線傾向は上昇傾向を示すオリンピック代表選手にはメダルなしが少なく、平坦・下降傾向はメダルを逃すものが多い。

曲線の上昇は一般的には、スロースタータと異常興奮に発展する側面としてネガティブに捉えられていたが、本研究により、スポーツの中でも特に個人競技種目においては、UK曲線における曲線の上昇は、有効に作用することが示唆された。柔道競技では群(個性派)が勝利する可能性が強く、その人柄にさらに上昇傾向が加わると、勝利する確率がいっそう高くなることが推察される。選手の個性を理解し、精神健康度を高め、心的エネルギー水準を上げ、曲線が上昇傾向となる指導が望まれる。

表1 全選手の曲線傾向別・人柄類型別・精神健康度別データの分布 単位:人(%)

人柄類型	精神健康度										精神健康度										合計					総計
	高	中上	中	中下	低	計	高	中上	中	中下	低	計	高	中上	中	中下	低	計	高	中上	中	中下	低			
1 おだやか型	1	3	2			6	2	2	2	1		7	5	14	5	6		30	8	19	9	7		43		
2 気づかい型				1		1						1	3	3	3	1		10	3	3	3	2		11		
3-1 朗らか型	1	3	2	2		8		2	2	1	1	6		1	2	3		6	1	6	6	6	1	20		
3-1d じっくり型	19	79	44	60	5	207	6	35	35	39	6	121	1	15	17	19	2	54	26	129	96	118	13	382		
3-2 温和型	1	3	4	2		10	4	15	5	2	1	27	18	53	27	12		110	23	71	36	16	1	147		
4 強気敢行型	1	2	3	1	1	8			2	6		8			1			1	1	2	6	7	1	17		
5 地道粘り型	13	31	18	11	1	74	14	41	20	20	1	96	4	15	17	9	1	46	31	87	55	40	3	216		
6 あっさり実行型												1		2	5	4		11		2	5	4	1	12		
7 内的安定型	20	20	4	2		46	19	12	5	2		38	3	6	2			11	42	38	11	4		95		
8 自己内閉型	74	176	86	96	6	438	38	65	62	40	12	217	24	46	47	32	10	159	136	287	195	168	28	814		
9 自己顕示型	1	2	4	5	12		1	3	1	3	8		1	5	3	3	12		3	10	8	11		32		
10 粘着型	9	21	25	13	1	69	14	37	34	20	1	106	3	13	17	5	1	39	26	71	76	38	3	214		
計	139	339	190	192	19	879	97	210	170	132	26	635	61	169	148	94	17	489	297	718	508	418	62	2003		
類似人柄群	15.8	38.6	21.6	21.8	2.2	100.0	15.3	33.1	26.8	20.8	4.1	100.0	12.5	34.6	30.3	19.2	3.5	100.0	17.5	37.8	24.3	18.0	2.4	100.0		

類似人柄群	精神健康度					合計	精神健康度					合計	精神健康度					合計	総計						
	高	中上	中	中下	低		高	中上	中	中下	低		高	中上	中	中下	低								
穏健派 (1,2,3-2,7)	22	26	10	5		63	25	29	12	5	1	72	29	76	37	19		161	76	131	59	29	1	296	
堅実派 (3-1d,5,10)	41	131	87	84	7	350	34	113	89	79	8	323	8	43	51	33	4	139	83	287	227	196	19	812	
活動派 (3-1,4,6)	2	5	5	3	1	16		2	4	7	2	15		3	8	7		18	2	10	17	17	3	49	
個性派 (8,9)	14	15	26	16	53	118		10	24	53	77	24		00	18	54	74	00	37	07	14	33	41	48	24
計	74	177	88	100	11	450	38	66	65	41	15	225	24	47	52	35	13	171	136	290	205	176	39	846	
計	139	339	190	192	19	879	97	210	170	132	26	635	61	169	148	94	17	489	297	718	508	418	62	2003	
	54.4	21.6	24.0		100.0	48.3	26.8	24.9		100.0	47.0	30.3	22.7		100.0	55.3	24.3	20.4		100.0					

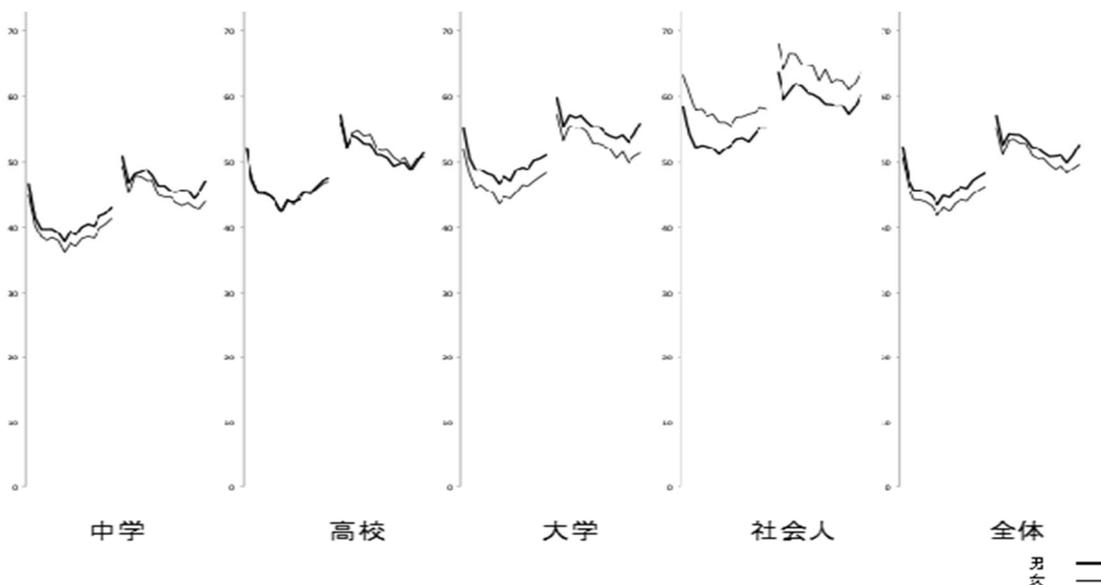


図1 年齢区分別・男女別平均曲線

表2 男女別3精神健康度出現比

	男子		女子		合計	
	人数	(%)	人数	(%)	人数	(%)
高	676	(53.8)	487	(65.2)	1163	(58.1)
中	317	(25.2)	132	(17.7)	449	(22.4)
低	263	(20.9)	128	(17.1)	391	(19.5)
合計	1256	(100.0)	747	(100.0)	2003	(100.0)

$\chi^2(2 \times 3) = 25.88 > 13.82$ ($p = .001, df = 2$)
 CR (1163, 449) = 17.78 > 2.54 **
 CR (449, 391) = 2.00 > 1.96 *

表3 オリンピック代表選手と世界選手権代表選手の人柄類型別分布 単位 人(%)

	8	3-1d	他	計
オリンピック出場	49 (57.0)	16 (18.6)	21 (24.4)	86 (100)
世界選手権選手出場	37 (46.8)	16 (20.3)	26 (32.9)	79 (100)
計	86 (52.1)	32 (19.4)	47 (28.5)	165 (100)

$\chi^2(2 \times 3) = 1.913 > 1.833$ ($p = .40, df = 2$)

表4 オリンピック代表選手と世界選手権代表選手の作業段階別分布 単位 人(%)

	①	A	B	計
オリンピック出場	51 (59.3)	32 (37.2)	3 (3.5)	86 (100)
世界選手権選手出場	34 (43.0)	36 (45.6)	9 (11.4)	79 (100)
計	85 (51.5)	68 (41.2)	12 (7.2)	165 (100)

$\chi^2(2 \times 3) = 6.350 > 5.991$ ($p = .05^*, df = 2$)

表5 オリンピック代表選手の戦績別作業量段階分布・曲線傾向分布 単位 人(%)

作業量段階	1位		2+3位		5位+他		計		統計
	人数	%	人数	%	人数	%	人数	%	
①	18	60	16	51.6	17	73.9	51	60.7	1位,2+3位,5位+他 × ① A,B+C
A	11	36.7	14	45.2	5	21.7	30	35.7	$\chi^2 = 0.460, 2.165, 3.182 < 5.991 - (2 \times 3)$
B+C	1	3.3	1	3.2	1	4.3	3	3.6	51:30:3 → $\chi^2 = 41.357 > 13.8^{***}$
計	30	100	31	100	23	100	84	100	① > A > B+C

曲線傾向	1位		2+3位		5位+他		計		統計
	人数	%	人数	%	人数	%	人数	%	
上昇	16	53.3	22	71	9	39.1	47	56.0	1位,2+3位,5位+他 × 上昇,平坦,下降
平坦	10	33.3	7	22.6	10	43.5	27	32.1	$\chi^2 = 2.124, 5.611, 1.054 < 5.991 - (2 \times 3)$
下降	4	13.3	2	6.5	4	17.4	10	11.9	47:27:10 → $\chi^2 = 24.5 > 13.8^{***}$
計	30	100	31	100	23	100	84	100	47 > 27 > 10

曲線傾向	メダリスト		非メダリスト		計		統計
	人数	%	人数	%	人数	%	
上昇	38	62.3	9	39.1	47	56.0	メダリスト: 非メダリスト CR = 4.037 > 2.58^{***}
平坦	17	27.9	10	43.5	27	32.1	メダリスト (上昇: 平坦: 下降)
下降	6	9.8	4	17.4	10	11.9	$\chi^2 = 25.178 > 13.80^{***}$
計	61	100	23	100	84	100	上昇 > 平坦 > 下降 非メダリスト (上昇: 平坦: 下降) $\chi^2 = 2.696 < 5.991$

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計3件（うち査読付論文 3件 / うち国際共著 0件 / うちオープンアクセス 3件）

1. 著者名 内村直也、横山喬之、齋藤正俊、石川美久、保井智香子、東山明子	4. 巻 18
2. 論文標題 UK法から見た柔道オリンピック代表選手の精神的特徴：戦績別の分析	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 講道館柔道科学研究会紀要	6. 最初と最後の頁 109-118
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

1. 著者名 横山喬之、齋藤正俊、内村直也、石川美久、保井智香子、東山明子	4. 巻 17
2. 論文標題 UK法から見た全日本柔道強化選手の精神的特徴：性別・年齢区分別初回検査時データの分析	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 講道館柔道科学研究会紀要	6. 最初と最後の頁 57-66
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

1. 著者名 横山喬之、齋藤正俊、内村直也、石川美久、保井智香子、船越正康、東山明子	4. 巻 19
2. 論文標題 UK法から見た全日本柔道強化選手の精神的特徴：最高精神健康度及び最高作業量段階に関する分析	5. 発行年 2023年
3. 雑誌名 講道館柔道科学研究会紀要	6. 最初と最後の頁 111-118
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

〔学会発表〕 計17件（うち招待講演 0件 / うち国際学会 0件）

1. 発表者名 横山喬之、内村直也、保井智香子、齋藤正俊、石川美久、松本裕之、野阪榮一、船越正康、東山明子
2. 発表標題 全柔連強化選手の世界選手権出場者に関するUK分析1) - 適正論から見た人柄型と精神健康度について
3. 学会等名 日本武道学会第54回大会
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 斎藤正俊、内村直也、保井智香子、石川美久、横山喬之、山本雅亨、船越正康、東山明子
2. 発表標題 全柔連強化選手の世界選手権出場者に関するUK分析2) - 曲線理論から見た作業量段階と曲線傾向について
3. 学会等名 日本武道学会第54回大会
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 内村直也、横山喬之、保井智香子、斎藤正俊、船越正康、東山明子
2. 発表標題 全柔連強化選手の世界選手権出場者に関するUK分析 オリンピック出場選手との比較検討
3. 学会等名 日本スポーツ心理学会第48回大会
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 横山喬之、保井智香子、斎藤正俊、松本裕之、船越正康、東山明子
2. 発表標題 全日本柔道連盟国際試合強化選手のメンタルサポート 男子40年・女子20年間の心理テスト：UKデータの全数分析ー
3. 学会等名 内田クレベリン精神検査研究会
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 内村直也、横山喬之、保井智香子、斎藤正俊、野阪栄一、船越正康、東山明子
2. 発表標題 全柔連強化選手のオリンピック出場者に関するUK法分析 - 適正論から見た人柄論と精神健康度について-
3. 学会等名 内田クレベリン精神検査研究会
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 齋藤正俊、内村直也、横山喬之、山本雅亨、保井智香子、船越正康、東山明子
2. 発表標題 全柔連強化選手のオリンピック出場者に関するUK法分析 - 曲線理論から見た作業段階と曲線傾向について -
3. 学会等名 内田クレベリン精神検査研究会
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 横山喬之・内村直也・齋藤正弘・石川美久・保井智香子・船越正康・東山明子
2. 発表標題 柔道におけるメンタルサポートに関する基礎研究1 - 強化選手40年間のUKデータから：最高精神健康度別分析 -
3. 学会等名 日本スポーツ心理学会第46回大会
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 内村直也・横山喬之・齋藤正弘・石川美久・保井智香子・船越正康・東山明子
2. 発表標題 柔道におけるメンタルサポートに関する基礎研究2 - 強化選手40年間のUKデータから：最高作業段階別分析 -
3. 学会等名 日本スポーツ心理学会第46回大会
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 齋藤正弘・内村直也・横山喬之・石川美久・保井智香子・船越正康・東山明子
2. 発表標題 柔道におけるメンタルサポートに関する基礎研究3 - 強化選手40年間のUKデータから：曲線傾向3分類別分析 -
3. 学会等名 日本スポーツ心理学会第46回大会
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 横山喬之、齋藤正俊、内村直也、石川美久、保井智香子、船越正康、東山明子
2. 発表標題 UK判定4指標から見た全日本柔道強化選手の精神的特徴1-男子選手半世紀の心理データ分析からー
3. 学会等名 日本武道学会第51回大会
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 内村直也、齋藤正俊、横山喬之、石川美久、保井智香子、船越正康、東山明子
2. 発表標題 UK判定4指標から見た全日本柔道強化選手の精神的特徴2-女子選手四半世紀の心理データ分析からー
3. 学会等名 日本武道学会第51回大会
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 齋藤正俊、内村直也、横山喬之、石川美久、保井智香子、船越正康、東山明子
2. 発表標題 UK判定4指標から見た全日本柔道強化選手の精神的特徴3-男女選手の心理データ分析からー
3. 学会等名 日本武道学会第51回大会
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 東山明子、植田辰哉、横山喬之
2. 発表標題 こころと身体の調整力
3. 学会等名 日本スポーツ心理学会第44回大会
4. 発表年 2017年

1. 発表者名 船越正康、東山明子、保井智香子
2. 発表標題 心理アセスメント利用の実際-内田クレペリン法を用いて-
3. 学会等名 日本スポーツ心理学会第44回大会
4. 発表年 2017年

1. 発表者名 東山明子、船越正康、丹羽劭昭
2. 発表標題 内田クレペリン法に基づくメンタルサポート事例の検討
3. 学会等名 日本スポーツ心理学会第44回大会
4. 発表年 2017年

1. 発表者名 保井智香子、東山明子、船越正康
2. 発表標題 男子大学生スポーツ経験者の精神健康度と食行動との関連-内田クレペリン検査を用いた検討-
3. 学会等名 日本スポーツ心理学会第44回大会
4. 発表年 2017年

1. 発表者名 東山明子、内村直也、横山喬之、保井智香子
2. 発表標題 全日本柔道連盟強化選手40年間の心理データから勝利達成にむけた精神的側面を探索
3. 学会等名 日本スポーツ心理学会第49回大会
4. 発表年 2022年

〔図書〕 計1件

1. 著者名 東山明子、横山喬之、内村直也、斎藤正俊、石川美久、保井智香子	4. 発行年 2023年
2. 出版社 せせらぎ出版	5. 総ページ数 197
3. 書名 内田クレベリン法からみた全日本柔道強化選手の精神的側面 ミュンヘンオリンピックからロンドンオリンピックまで	

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
研究分担者	内村 直也 (Uchimura Naoya) (70529990)	大阪産業大学・スポーツ健康学部・准教授 (34407)	
研究分担者	横山 喬之 (Yokoyama Takayuki) (50585263)	摂南大学・スポーツ振興センター・講師 (34428)	
研究分担者	齋藤 正俊 (Saito Masatoshi) (40619540)	神戸親和女子大学・発達教育学部・教授 (34514)	
研究分担者	石川 美久 (Ishikawa Yoshihisa) (00532839)	大阪教育大学・教育学部・准教授 (14403)	
研究分担者	保井 智香子 (Yasui Chikako) (40632998)	立命館大学・食マネジメント学部・准教授 (34315)	

6. 研究組織（つづき）

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
研究協力者	船越 正康 (Funakoshi Masayasu)		

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関